

## 2024年度自己評価結果公表シート

### 本園の教育目標

キリスト教信仰に基づき、幼児一人ひとりを大切に親と子の育ちの場となるよう努めるものとする。

(施設の目的及び運営方針)

第2条 この幼稚園は、幼稚園型認定こども園であって、「日本基督教団信仰告白」に言い表されたキリスト教信仰を基本理念とし、学校教育法第22条及び第23条に基づき幼児を保育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする。

2 本園は、社会の期待や願いに応えられる創意と活力のある保育活動をすすめ、園児・保護者・地域に信頼されるよう努めるものとする。

3 本園は、安心・安定した情緒と落ち着いた保育環境の中で、健やかで豊かな心と体が育つよう保育を行うものとする。

4 本園は、子育て支援と対話・相談を大切にし、親と子の育ちの場となるよう努めるものとする。

神様の守りと導きの中で、共に生かされていることを感謝し、喜びと祈りを持って保育に携わる。

一人ひとりの見とりを丁寧に行い、興味や資質、友達関係、遊びの具体的な姿を保育者間で共有し、願いに基づいた保育計画をしっかりと立て実践し反省し見直していくことを常とする。“縦割り構成の自由保育”には高度な配慮と保育者の資質が求められるが、保育者自身も学び、自己研鑽を積み、成長する保育者集団として、子どもが主役の保育を創り出せるよう努める。

#### 1. 新体制2年目の中で 共に歩もう～神様の愛の中で～

新体制2年目となる今年度は、昨年度までの課題をそのままにせず、工夫し挑戦し前進していくことを念頭に歩んだ。

お預かりしている子どもたちが、“旭”の保育の中で、生き生きと生きる場・成長する場とすべく、全職員で取り組んだ。

#### 2. 保育の充実にむけて

ア、キリスト教の考え方をベースとして、聖書に親しみ祈りながら、園の根底である一人ひとりの存在を尊ぶ「キリスト教保育」への理解を深め保育にあたった。一年の年間主題についても、どこからか持ってくるのではなく、今、目の前にいる今年子どもたちにぴったりの主題を立てたいという思いで、職員間で何度も子どもの姿を出し合い、成長への願いを出し合い、どんな主題・年間聖句のもとで、保育を構築していこうかと話し合いを重ねて決定することができた。これは旭が長年大切にしてきた年間主題の決め方で、原点に戻る形になった。子どもたち同様、保育者も主体的に自分たちで話し合い祈りつつ決めた年間主題のもと、意欲的に子どもにかかわる姿が見られた。月の主題・聖句・願いも、年間指導計画とともに教師会で共有した。

イ、縦割り自由保育においては、複数担任制で今年度も保育にあたった。

保育者自身がより主体的に子どもを見つめ関わり、そこで得た“気づき”を共有しながら計画をたて実践していくことを念頭に日々保育を積み重ねた。子ども一人ひとりの育ちや保育については例年通り“週案会”で共有し保育を考え合う時間をとったが、保育者も増え、より細やかな子どもの育ちの共有をしたかったこともあり、朝のお祈りの後の少しの時間を“子どもの姿の共有の時間”とする試みをはじめた。小さな小さなエピソードの中にもその子どもの姿に心をとめた保育者の思いがあり、子ども理解を共有するとともに、自分の言葉で語る同僚の姿に、同僚の人となりも知り合うことが出来て、とても穏やかな良い朝の時間を毎日過ごし保育に入ることができ、有効であった。

保育業務は多岐にわたるが、時間を上手に捻出して、これからもゆたかな保育をチームで創っていけるよう工夫していきたい。

ウ、「子どもは遊びの中で育つ」「遊びとは学びである」ことを大切に、本年も、子ども自身が遊びに出会い遊び込んでいく時間をできる限り確保し、一斉の活動などで遊びが一度中断したとしても、遊びが再開できることや今日の遊びの続きが明日も出来るということを可能な限り保証していく配慮を行った。

保育者は子どもの興味や遊び方、成長への願いなどを加味して、刺激となる遊びの提案や環境を積極的に整えていくことを保育者間の共通理解として日々保育にあたった。

昨年度までの反省として、年々、散歩などの経験も減り、子どもたちの体力や運動能力が低下していることを挙げたが、その対策の一つとして、劇空間夢幻工房の方を講師でお迎えし、身体を楽しく動かす「さくら・さくらんぼプログラム」を年2回行った。音源や生のピアノの音、バイオリンの音に合わせて、今まで体験したことのない身体の動かし方に出会い、夢中になって楽しむ姿が見られた。これからも、子どもたちの体力・運動能力の向上に心を配った活動を入れていきたい。

同じく課題としていた室内あそびについては、様々な遊びを両立するための保育空間の使い方を工夫した。長時間の外遊びが出来にくい天候（猛暑、寒さ）の時には、室内での遊びの提案を工夫し楽しい時間を過ごした。また、製作活動については、新しい素材を使うなど、教材研究もしながら、個々での製作、部屋ごとでの製作、行事後の製作、年次ごとの製作と、様々な場面で子どもたちの主体的な製作活動が実現できるよう努めた。今後も楽しい製作活動を実現していきたい。

また、子どもたちの活動の様子を保育室内に可視化する試みをスタートした。

「サツマイモの育ちや収穫までの歩み」「エビガラスズメガの幼虫がいたよ」「お店屋さんごっこの準備から開店までの様子」「マリーゴールドなど身近な種の不思議」「創立記念日のケーキ作り」など、保育者が着目した子どもたちの遊びは様々で、写真やイラストを用いながらまとめたものが、お部屋や廊下、ホールなどに貼り出され、自分たちの遊び・友だちの遊びを目で見て楽しむことが出来た。オリジナリティのあるお部屋作りに積極的に取り組んだ。

年間を通し、自己実現、自己肯定感の育ち、意見の衝突、他者の思いや存在を受け入れること、協働の遊びの姿など、幼児期に育つ大切さを謳われている非認知能力の育ちが豊かに育まれていることを感じた。

エ、行事については、今年度も、願いや一つひとつの活動の意味合いを理解し、共通の思いで取り組めるよう時間をかけて計画し準備し実施した。

特に年長児の夏期保育（2泊3日のお泊り保育）では、自分たちで歩いていく、自分たち

で生きていく、知恵と力を出し合って共に生きる3日間になるように・・・と願いを持ち、より入念な計画と準備を行った。当日は、雨降りもあったが、様々な盛り沢山な時間を過ごし、かけがえのない豊かな経験となることができた。

また、より活動的に過ごしたいという思いから、幼児ぐみ全員での5年ぶりにバスを使った春の遠足を計画した。残念ながら天候に恵まれず中止となったが、翌月の保育計画をすべて見直し、部屋ごとのバス散歩（ミニ遠足）という形で遠足を実現した。生活のベースとなるお部屋ごとの遠足は、お部屋の仲間という意識をお互いにもつことにもなり楽しい遠足になった。

運動会では、昨年に引き続き、全園児での運動会を実施した。懸案である駐車場についても今年も近隣の施設のご協力をいただき、駐車スペースを確保し、事前の申し込みを受け割り振りをし、保護者の方のご協力をいただくことが出来た。

焼き芋大会では、例年になく、落ち葉が不足してしまっていたが、保護者の方、近隣の方にもご協力をいただき、沢山の集まった落ち葉で無事に焼き芋大会を実施することが出来た。

年間を通して保護者の方から沢山のご協力・ご理解をいただき、ゆたかな行事を行うことができた。

オ、子どもの情操教育の一環として、昨年度に引き続き、1月にヴォルナーナトリオの皆さんによるコンサートを保育の中で開催した。バイオリン・チェロ・ピアノの生の楽器の音色に触れる良い機会となり、音楽の世界に引き込まれ、心を弾ませる多くの子どもたちの姿があった。

また、続けて3月には、さらに、オーボエ・フルート・クラリネットの演者の方をお招きして、サプライズコンサートを開催した。耳を澄まし、音に聞き入り、やがては身体を揺らし、踊り、歌って、身体全部で音楽を楽しむ姿が見られた。

感性が豊かな乳幼児期に、良質な音楽の生演奏を、いつもの幼稚園の空間で友達と共に味わえたことの喜びは大きく、五感すべてで音楽を楽しむ経験はとてもゆたかな時間であった。

また、母の会有志（親子読書クラブ）による絵本の読み聞かせを年に2回行った。母たちの創意工夫した読み聞かせはとても楽しく、絵本の世界・物語の世界を身近に感じる嬉しい時となった。

カ、年々利用が増えている預かり保育については、長時間の保育時間になる子どもも多いことからより家庭的な保育を、安全に提供できるように配慮した。

特に低年齢児の預かり保育利用者が増加していることもあり、クローバーの部屋でおやつを食べてから、ホールに移動する形に変更し、落ち着いて飲食をすることと、楽しく遊ぶことの間隔を分けた。シフトを工夫して大人の人数を多く配置し、安全で楽しい夕方の時間を過ごせるよう努めた。

キ、2歳児教育・保育（クローバーの部屋）では、個人差が大きく、育ちの葛藤をくぐり抜けて自立の芽生えが育つ成長過程の子ども一人ひとりに対してより添った丁寧な保育が行われた。今年度も教育利用（認定外こどもと満3歳になった1号こども）と保育利用（3号認定こども）合わせて、2学期の終わりの時点で27名という過去最多の保育人数となったが、第5保育室・第6保育室と隣の第4保育室の3部屋を使って、広くなった保育室をパーテーションなどで必要に応じて空間を分け、様々な子どもたちの成長に対応する保育を心掛けた。

また、初の試みとして、翌春にクローバーの部屋へ入園を予定している子どもの満2歳児入園を1月に実施した。保護者の強い要望があつての実施であったが、職員数が今年は大変恵まれているため、安全に配慮しながら、満2歳児4名の保育を楽しく実践することが出来た。

積極的に毎日戸外に出る活動をする、手指を動かす製作活動・リズム感や一体感・情緒が育まれる表現活動など歴代のクローバーで培ってきた2歳児教育の活動をバランスよく取り入れ、子ども一人ひとりの自己肯定感・友だちと一緒に心地よさの体感・遊ぶ力の育成に努め豊かな成長の場となった。

ク、ブログの発信は基本的に毎日行い、子どもたちの遊びの様子とともに園の子ども観・保育観を発信する手立てとなった。同様に、園だよりやクラスだよりでも子どもの育ちあう姿を発信した。

ケ、外部機関との連携

子どもの育ちを多角的に援助するため、様々な教育機関や医療機関や事業所等との連絡を密にして、共有し、保育に生かせるよう支援会議などに積極的に参加した。連携をとり、共通認識を持ちながら、子どもと向き合うことにより、子どもたちはより豊かな成長を見せた。また、保護者支援の一環ともなった。

また、今年度も、3学期には、卒園を控えた年長児が、社会見学として、近くの小学校に学校探検に行き、体育館理科室など学校の内部を見学させていただく機会に恵まれた。

地元の小学校との連携を大切にした有意義な活動の時間となった。

コ、保護者との連携

4月のはじめに保護者会を開催し、園の保育の基本方針や今年度の行事などについて説明を行った。年2回行っている保育参加は、5月は指定した時間の参加、2月は自由に時間が選べる保育参加を行い、好評であった。保育参加を通し、子ども理解・幼稚園理解に繋がっていくと感じた。

一年間を通して、保護者の方からのご理解と信頼、沢山のご協力をいただいたことを感謝したい。

### 3、設備・遊具と安全、環境への対応について

ア、毎朝の保育者による安全点検を行った。不具合の箇所があった場合は、こどもの安全を守るため、早急に対応することを心掛けた。昨年、外部の専門業者に依頼して、園庭遊具の安全点検を行った際のアドバイスを生かしながら、環境設定を行った。長年にわたる課題であった園庭づくりにいよいよ次年度の夏休みに着手することになったが、どんな園庭にして、どんな遊びを子どもたちに経験させたいかという保育者視点での話し合いを何度も重ねて、計画を進めた。

イ、ここ数年、園児も職員も増え、また自家用車での送迎の方も多いため、送迎時の駐車場の混雑が課題となっている。職員用の駐車場を近隣で借り、駐車場の誘導に立ち、保護者の方からも大きなご協力をいただきながら、安全安心な登降園になるように努めた。引き続き、安全な送迎をしていただけるよう、配慮をしていきたい。

ウ、5月の連休期間に、建物の丸柱や雨どいの塗り替え塗装を行った。

エ、秋に、シャロームの門の塗り替え塗装を行った。

オ、計画していたICT化「レーザーキッズ」の導入を6月から開始した。預かり保育・希望保育、及び給食の申し込みが、手書きからアプリでの申し込みにかわり、保護者負担軽減に努めた。アプリへの登録など保護者の方にもご協力をいただいた。

カ、防犯にも配慮した園庭フェンス設置については、次年度の夏休み園庭工事の時に、弱くなって

いるフェンス部分等の取り換えを兼ねながら行う計画とした。

- キ、昨年度設置できなかった110番通報装置については、秋に設置が完了した。想定していない事件が長野市内でもおこっているため、安全のための備えの一つとしたい。
- ク、使用済みおむつについては、行政処分事業を開始し、保護者持ち帰りをやめた。
- ケ、2階屋上のプールに、日除け対策として、組み立て式の大型テントを設置した。
- コ、防災用の倉庫を敷地内に設置した。
- サ、冬の駐車場の雪対策として、除雪機を購入した。
- シ、子どものプライバシーへの配慮の為、パーテーションを購入したり製作したりした。着替えなど配慮が必要な時等に使用している。
- ス、今年度も、火災・地震による避難訓練だけではなく、大規模災害を想定した保護者に迎えに来ていただく“引き取り訓練”を行った。また、2階からの避難や予告なしの訓練など、様々な場面を想定し訓練を行った。消防士の指導のもと、消火訓練通報訓練も行った。
- セ、子どもたちの生活の場としてのSDGsの取り組みを引き続き大切にしたい。給食室の職員が中心となって、毎日の野菜くずや給食の食べ残しを様々なコンポスト容器を使って、土に返し、花壇などで再利用した。園庭や門の入口の花壇・建物内の植木鉢などいろんな場所で堆肥によって育った花々が愛らしく咲き、環境設定の一端を担った。また、堆肥を使い庭で育てたかぼちゃ・ズッキーニ・きゅうり等を調理していただいて、“お店屋さんごっこ”でいただく嬉しい時間もあった。

#### 4. 子育て支援、家庭支援体制

子育て支援として行っている「こひつじ広場」は、好評を得て、今年度も楽しい活動を提供した。例年同様に教育的効果を考え満1歳～2歳、2歳～就園前と2グループに分けて内容を計画して保育を行い、また、例年参加者が殺到する活動については、人数を決め予約制とした。1～3歳まで参加出来る「園開放」は、年に2回、楽しいテーマを掲げ開催した。

また、こひつじ広場とは別に「ひだまりの会」を設立した。子育て支援の一環であるが、子育て中の保護者が、毎日の子育ての話や悩みを気軽に話し合えることを願い、初年度の今年度は、年に4回ほど開催した。参加者は、未就園児の保護者、在園の保護者など様々であったが、職員と一緒に、語り合う穏やかな時間となり好評であった。

#### 5. 保育者の質の向上、園内研修の充実へ

ア、自分の部屋の子どもだけ”“目の前にいる子どもだけ”見ているのではなく、全体を見通す力をつけていこうということと、全員で全員の子どもをみるということは、誰かにやってもらうのではなく、どの子どもに対しても一人ひとりの保育者が責任をもってしっかり関わること、自分が行動する、気付いたら発信する、自分が出来ない状況にあるならば、同僚に的確な説明をして託す、誰にでもわかる明確な言葉を用いて「報告・連絡・相談」をすることを共有し合った。

イ、園内で起きた怪我やヒヤリハットなどについても、報告し合うだけでなく、なぜ起きたのか、何が足りなかったのか、どうすれば次は防げるのか等沢山考えて話し合う時間をとった。

朝の打ち合わせの時間にも共有し、子どもの姿の見とり・行動の予測により心を向け、安全面はもちろんのこと、子どもの今を捉えた環境や経験を準備していく保育へと繋げていかれるよ

う努めた。

ウ、今年は園内研修に力を入れ、年に13回の研修の機会をもった。「旭の保育」「アレルギー」「不適切保育にならないために」「怪我」等々、様々なテーマを決めて研修を行った。

小さなグループに分かれて感想や意見を出し合う、付箋を使って書いて紹介するなど、参加した職員が気負わずに、そして主体的に参加できる研修のあり方を昨年に引き続いて工夫した。園内研修の中で最も力を入れた研修は「言葉」の研修であった。旭幼稚園は、長年、言葉を大切にしている幼稚園であることは職員間で周知していたが、保育に携わる全職員と共有したく、正職員だけではなくパート職員の方にも研修に参加していただいた。シフトや多様な業務があるため、全員で研修をするのは難しいため、小グループに分かれて、同じ教材・同じ温度で行う研修を同時期に7回開催した。

毎日子どもと向き合ってくださいのパートの先生方にも同じ学びをしていただいたことで、旭が大切にしている言葉の使い方、その根っこにある保育観・子ども観を共有し、お互いに思いを伝えあい学び合える良い研修となった。

職員一人ひとりの持てる力を十分に発揮していくためにも、保育者同士が打ち解けあい心と言葉を通い合やすことの大切さを感じた。参加型の研修を工夫していくことで保育の質もモチベーションも上がると感じたので、次年度以降も、時間を作り保育者が主体的になれる園内研修を重ねていきたい。

オ、多くの保育者がキャリアアップ研修を中心とした各種研修に参加し学び、教師会で内容の理解・共有に努めた。